検索

『ファウスト』雑感 V ― 糸を紡ぐグレートヒェン ―

Notizen über „Faust“ V ― Gretchen am Spinnrad ―

漆 谷 克 秀

Katsuhide Urushidani

５．糸車の歌（糸を紡ぐグレーヒェン）

グレートヒェン (Gretchen) という名前から、どのような女性像が思い浮かんでくるであろうか？ ドイツ人なら多分、ゲーテのこの作品『ファウスト』に登場する女性を、まず最初に思い浮かべることであろう。先に第一部の最終場「牢獄」で取り上げたグレートヒェンには、すべてを惜しみなく「愛」に奪われてしまった、いとおしい女性の姿が見られた。ファウストに出会い、愛に胸をときめかせるグレートヒェンは、どのような少女であったのか、それをみていこう。恋するゆえ、憧れに胸を膨らます 14 歳の乙女の想いが「糸車の歌（糸を紡ぐグレートヒェン）」に凝集されている。14 歳というのは、当時、結婚が認められる年齢であった、

まず、ファウストのことから述べねばならない。50 歳ぐらいの老齢のファウストは、悪魔メフィストフェレスと契約 (いずれこのことについて詳述する) を結ぶ。メフィストフェレスに「魔女の厨」に連れていかれ、そこで魔女が処方した秘薬を服用し、20 歳の青年に変身する。メフィストフェレスは、まずこの世の「恋愛」によってファウストの精神を惑わし、たぶらかすべく計るのである。

次の場「街路」(Strasse) では、若返ったファウストが通りすがりの娘マルガレーテに声をかけるところから始まる。つまり、路上でナンパをするのである。女性にどのように声をかけるのか悩んでいる方は参考になればよいであろう。

FAUST. Meine schönes Fräulein, darf ich wagen,
　　Meine Arm und Geleit Ihr anzutragen?
MARGARETE. Bin weder Fräulein, weder schön,
　　Kann ungeleitet nach Hause gehen. Sie macht sich los und ab. (2605-8, S.84)

ファウスト．　美しいお嬢様、よろしければ、
　　腕をお貸しし、あなたをお送りいたしましょうか？
マルガレーテ．　お嬢様でも、美しくもありません、
　　同伴してくださらなくとも、家に帰れます。（すり抜けて立ち去る）

とりつくしまもない無愛想な拒絶である。それで怯んでいては話しにならない。ファウストは、一目でマルガレーテに引き付けられたことが次に続く台詞からわかる。

FAUST. Beim Himmel, dieses Kind ist schön!
　　So etwas hab' ich nie gesehen.
　　Sie ist so sitt- und tugendreich,
　　Und etwas schnippisch doch zugleich.
　　Der Lippe Rot, der Wange Licht,

Die Tage der Welt vergess' ich's nicht!
Wie sie die Augen niederschlägt,
Hat tief sich in mein Herz geprägt;
Wie sie kurz angebunden war,
Das ist nun zum Entrücken gar! (2609-18, S.84)

ファウスト．　ほんとうに、この子は美しい！
このような子を見たことがない。
彼女はそう、しとやかで、身持ちがいい。
それでいて、少しツンとしている。
赤いくちびる、かがやく頬、
生きているかぎり、ぼくはそれを忘れない。
彼女の目を伏せた様子が、
ぼくの心に深く刻み込まれた。
そっけない彼女の仕草が、
それがますます夢中にさせる。

ファウストは、素っ気なく拒絶されたとはいえ、マルガレーテの容姿や仕草を十分に認めている。冷たくされたのに、その仕草も良いように解している。しかし、ここでファウストの心に刻み込まれたマルガレーテは、欲望の対象としての女性でしかない。この直後に登場するメフィストフェレスに、マルガレーテを世話するように命じる。メフィストフェレスはマルガレーテについて次のように言う。

MEPHISTOPHEJES. Da die? Sie kam von ihrem Pfaffen,
Der sprach sie aller Sünden frei;
Ich schlich mich hart am Stuhl vorbei.
Es ist ein gar unschuldig Ding,
Das eben für nichts zur Beichte ging;
Über die hab' ich keine Gewalt! (2621-26, S.84)

メフィストフェレス．　あそこの彼女か？ 坊主のところから帰ってきたとこだ。
坊主が言ってた、彼女にはなんの罪もない、とね、
わたしゃ、懺悔椅子のすぐ傍らをこっそり通り抜けてきましたよ。
本当に無邪気な娘だ、
なにもないのに告解に行くのだ。
そんな子、わたしには御しがたい。

マルガレーテは教会フェチである。いったい何を告解に行ったのであろうか。罪にもならないことを懺悔され、坊主も困っていることであろう。メフィストフェレスにとっても、このような人間を苦手とする。欲望のない、あるいは欲望の小さな人間をどのように扱えばよいのか判らない。欲望があれば、それを手掛かりにすることもできる。罪や科を見い出せるのなら、それにつけ入ることもできる。しかし、マルガレーテにはそのようなものが見い出せないのだ。この劇中において、メフィストフェレスがマルガレーテと直接言葉を交わすのは、「隣の女、マルテ」を介した場面だけで、その他にはほとんどない。メフィストフェレスは、マルガレーテを意図的に避けているようにさえ見えてくる。

そんなマルガレーテを落とすためには策を練る時間が必要だと、ファウストに言う。だが、「自堕落野郎のように」(wie Hans Liederlich)「フランス男のように」(wie ein Franzos)、恋慕の情が、欲望そのものとしてファウストの内に沸き立っている。そして、メフィストフェレスに言い含まれると、マルガレーテが身に着けていたものを調達することを要請するのだ。なんと情けない男であろうか。するとメフィストフェレスは、その欲情を掻き立てるように、マルガレーテが隣りの家に行っている間に、彼女の部屋に入り込もうと誘う。それに応ずるファウストは、メフィストフェレスにプレゼントを用意するように命じるのである。このプレゼントが曲者であった。

次の「夕べ」(Abend) の場で、家に帰ってきたマルガレーテは、ファウストのことが気になっているようだ。

MARGARETE ihre Zöpfe flechtend und aufbindend.

Ich gäb' was drum, wenn ich nur wüßt',
Wer heut der Herr gewesen ist!
Er sah gewiß recht wacker aus,
Und ist aus einem edlen Haus;
Das konnt' ich ihm an der Stirne lesen-
Er wär' auch sonst nicht so keck gewesen. Ab. (2678-83, S.86)

マルガレーテ. (おさげを編み、結い上げながら)

今日のあの方はどなただったかしら、
わたし、知っていたらおあげするものがあったのに。
あの人、ほんとうに立派な人に見える。
高貴な家の方なのでしょう。
あの方の顔立ちからそれが読み取れる。
そうでなければ、あの方、あんな向う見ずになれないわ。(立ち去る)

あのような態度を見せたが、マルガレーテはファウストに好感を抱いた。互いに一目ぼれ

であった。ただ図々しいだけなのに、ファウストの行為を良い方向に解している。やはり第一印象は大切である。それが良ければ、何事もよい方向にとらえられていく。またそれだけ、第一印象に欺かれることもよくあるようだ。

この後マルガレーテが部屋を出ていくとすぐに、メフィストフェレスとファウストが現れ、メフィストフェレスに誘われるようにして、ファウストも静かにマルガレーテの部屋に入る。しばらくの沈黙の後、ファウストはメフィストフェレスに”Ich bitte dich, laß mich allein!”（お願いだ、ひとりにしてくれ！）と言う。”Nicht jedes Mädchen hält so rein.”（どの娘もこんなにきれいにしているわけじゃありませんよ）と言って、メフィストフェレスは立ち去る。ファウストも、この部屋の清潔さに、神聖なきらめきを感じて、圧倒されている。そして、胸の内に潜む穢れも浄化されて、欲望のままであった恋愛感情もたちまち恋の苦しみに変容してしまった。このあと、長くて大仰なファウストのモノローグが続くわけだが、適当に省略して引用する。わたしは、このような大仰なセリフが大好きである。

FAUST rings aufschauend. Willkommen, süßer Dämmerschein,
Der du dies Heiligtum durchwebst!
Ergreif mein Herz, du süße Liebespein,
Die du vom Tau der Hoffnung schmachtend lebst!
Wie atmet rings Gefühl der Stille,
Der Ordnung, der Zufriedenheit!
In dieser Armut welche Fülle!
In diesem Kerker welche Seligkeit! (2687-94, S.87)
・・・・・・・・・・・・・・・
Natur! Hier bildetest in leichten Träumen
Den eingebornen Engel aus!
Hier lag das Kind, mit warmem Leben
Den zarten Busen angefüllt,
Und hier mit heilig reinem Weben
Entwirkte sich das Götterbild!

Und du! Was hat dich hergeführt?
Wie innig fühl’ ich mich gerührt!
Was willst du hier? Was wird das Herz dir schwer?
Armsel’ger Faust! ich kenne dich nicht mehr. (2711-20, S.87)
・・・・・・・・・・・・・・・
ファウスト（周囲を注視しながら）．　ようこそ、甘き薄暮の輝き、
おまえは、ここの聖域を織りなす光だ！

ぼくの心をつかまえてくれ、おまえ、甘き恋の苦しみ。
おまえは、恋い焦がれながら希望の露で生きながらえている！
周囲には静けさと秩序と
充ち足りた思いとが、なんと息づいていることか！
この貧しさのなかに豊かさが！
この牢獄のような狭い部屋に無上の喜びが！
・・・・・・・・・・・・・・・
自然よ！ おまえは、ここで軽やかな夢のあわいに
生まれつきの天使を育てあげた。
ここにその娘はいた、暖かい生命で
やわらかい胸をみなぎらせて。
ここで神聖な汚れのない営みでもって、
神にも似た姿が紡ぎだされた！

そしておまえはどうだ！ なにがおまえをここに連れてきたのか？
こんなにも切なく、心が揺り動かされているのを感じている！
おまえはここで何をしたいのだ？ どうしておまえの心は重くなるのか？
みじめなファウスト！ おれにはもはや、おまえが分からない。
・・・・・・・・・・・・・・・

ここで「おまえ」(du) と呼ばれているのは、この部屋からファウストが感受した心情であり、それが自己自身を指すものとなっていく。この部屋には「静けさと秩序と充ち足りた思い」が息づいており、「貧しさのなかに豊かさが」、狭くとも「無上の喜びが」存在しているのである。一応、「この牢獄のような狭い部屋」と訳したが、ドイツ語では「この牢獄」(in diesem Kerker) とある。おそらく、第一部の最終場を読者の意識のうちに予知させている働きがあるのかもしれない。この語が「グレートヒェン悲劇」に一種の枠組みを作っているように思える。

マルガレーテを「生まれつきの天使」と、「神にも似た姿」とも呼ぶ。たとえ錯覚であったとしても、一生に一度でよい、一人の女性を心からこのように呼ぶことができれば幸せであろう。しかし、それが純粋な気持ちから発せられていれば、それだけ自己に跳ね返ってくる。ここでは愛の思いが罪の意識として跳ね返っている。人間はつねに、反問しながら生きている。何かそうではない自分も感じてくるのであり、それは自己否定に導く。ファウストは自己を「お前」(du) と二人称で語りかけ、「みじめなファウスト」と呼ぶ。自制する心情を抱きながらも、抑えることのできない欲情を覚えており、「俺はもはや、お前が分からない」というのだ。もちろん、ここの一人称も二人称もファウスト自身を指す。このように自問自答することは、我々の日常においてもあることで、反問することが、次の日常を生きていく

原動になることもある。

しかしここでは、なにかぐずぐずしているファウストが見いだされる。それは、最終場のファウストにもいえることだ。下に帰ってくるマルガレーテを見たメフィストフェレスがファウストを促すと、「もう二度と戻ってこない」(Ich kehre nimmermehr) という。マルガレーテともう会うこともないと決心した言葉である。そんなことも構わずに、メフィストフェレスは、どこかで調達してきた小箱を、着替えの入った衣服箱に潜めるのである。

入れ替わるように入ってきたマルガレーテは、室内にむせ返るような尋常ではない空気に不審を抱き、窓を開ける。不安を感じながらも、ドイツ・リートとしてよく知られている、生涯ひとつの愛を貫いた「トゥーレの王様」(Ein König in Thule) を歌いながら着替える。脱いだ衣服をしまおうとして衣服箱を開け、そして小箱を見つける。中には宝石が入っていた。それらを身につけたりして、鏡の前に立ち、マルガレーテは言う。

Wenn nur die Ohrring' meine wären!
Man sieht doch gleich ganz anders drein.
Was hilft euch Schönheit, junges Blut?
Das ist wohl alles schön und gut,
Allein man läßt's auch alles sein;
Man lobt euch halb mit Erbarmen,
Nach Golde drängt,
Am Golde hängt
Doch alles. Ach wir Armen! (2796-2803, S.90)

せめてこのイアリングだけでもわたしのものであったら！
それだけでまったく違うように見えてよ。
美しいことも若いってこともなんの役に立つのでしょう？
それはたしかに素敵よ、好ましいことよ、
でも、ただそれだけのこと。
ほめてくれても半分はあわれみから。
金を求めて急きたて、
金にしがみつく
それがすべてなのね。アァ、わたしたち、貧乏人は！

どうして、女性は「光り物」に弱いのであろう？ 宝石を目の前にしてマルガレーテは自分の貧しさを嘆く。真の豊かさは、内面の美しさによるのだ、とか、そんなことを言ったところで役に立ちそうにもない。貧しくはあるが、庶民としての日常を疑いもせずに過ごしてきたマルガレーテであったが、メフィストフェレスの思惑どおり、「光り物」という悪魔の

誘惑に動揺するのである。

次の場「散歩」(Spaziergannng) で、考え込んでうろつきまわるファウストのところに怒り心頭に発するメフィストフェレスがやって来る。マルガレーテに贈った宝石を母親が見つけ、素性のわからないものなので取り上げて、それを教会に寄進したのである。宝石をかっぱらった坊主が憎くてたまらないようだ。やり場のない怒りを覚えるメフィストフェレスは次のように言う。

Die Mutter ließ einen Pfaffen kommen;
Der hatte kaum den Spaß vernommen,
Ließ sich den Anblick wohl behagen.
Er sprach: So ist man recht gesinnt!
Wer überwindet, der gewinnt.
Die Kirche hat einen guten Magen,
Hat ganze Länder aufgefressen,
Und doch noch nie sich übergessen;
Die Kirch' allein, meine lieben Frauen,
Kann ungerechtes Gut verdauen.
FAUST. Das ist ein allgemeiner Brauch,
Ein Jud' und König kann es auch.
MEPH. Strich drauf ein Spange, Kett' und Ring',
Als wären's eben Pfifferling',
Dankt' nicht weniger und nicht mehr,
Als ob's ein Korb voll Nüsse wär'
Versprach ihnen allen himmlischen Lohn –
Und sie waren sehr erbaut davon. (2831-48, S.91)

母親が坊主を呼びに行かせた。
坊主は母親の戯れ言を聞こうともせず、
たちまち気に入ってご満悦だ。
「ご奇特なことです」とぬかしよった。
「己に勝つ者こそ、ご利益を得るのです。
教会は丈夫な胃を持っておりまして、
どのような国土だって、しっかり平らげてきましたよ、
でもまだ、一度だって食べ過ぎたことはないのです。
教会だけが、ご婦人方、
わけのわからぬ物を消化できるのです」だって。

ファウスト.　　いつもの手口じゃないか、
　ユダヤ人や王様だって同じようなことをする。
メフィスト.　　さらにはブローチもネックレスもリングも、
　なんの値打ちもないもののように、かっさらう。
　まるで籠いっぱいのクルミをもらっただけのような、
　そのぐらいの礼しか言わないのに、
　ご婦人方に天国の応報を約束する―
　またそれで、ご婦人方は感動なさるというわけだ。

坊主の様態に腹を据えかねているメフィストはまた、教会に対して敬虔な装いを見せかける女たちにも、心中におさめきれない怒りを覚えている。しかし、ファウストは、悪魔以上に悪魔だと教会を罵るメフィストの話を聞きながら、グレートヒェンのことしか念頭にはない。落胆したであろうグレートヒェンの様子を尋ね、次の贈り物 (もちろん光り物) を用意することを、また、隣の女と段取りをつけて、グレートヒェンとの逢瀬を求めるのである。

教会の貪欲さは、第二部第四幕「高山」(HOCHGEBIRG) の最終の場「対立皇帝の天幕」(DES GEGENKAISERS ZELT) につながっていく。そこでは、敗戦濃厚な皇帝が、メフィストフェレスの怪しげなまやかしの戦術よって勝利を得るのである。この場の最後に、「大司教兼大宰相」(S. 329f.) が登場し、皇帝の背徳な行為につけ込み、罪深き土地を教会に寄進することを要求する。さらにいろいろな税金の徴収権なども求めるのである。それでも、教会の胃袋は充ることはない。皇帝は、国土のすべてを教会に奪われてしまうような状況を想像するのである。

次の場面は、隣のマルタの家や庭が中心となる。この標題としている「糸車の歌（糸を紡ぐグレートヒェン）」を挟んで、ファウストとグレートヒェンが会うことになる。ここでは二つのことが問題とされている。一つは「恋愛」の形態である。ファウストとグレートヒェンのカップルとメフィストとマルテのカップルが「マルテの庭」を交互に行き来してそれを表す。少し罪の意識を抱きながらも純粋に「愛する気持ち」で一心に求め続ける普通の恋愛。これはファウストとグレートヒェンのの役どころである。もう一つは、収支勘定を意図している恋愛で、媚びを売りながらなまめかしく金銭を勘定している恋愛である。これはマルテとメフィストの役どころで、欲深いマルテと、なんとかはぐらかそうと真剣に努力するメフィストの話術は、世の男性方にも役立つかもしれない。

もう一つは、「グレートヒェンの問い (Gretchenfrage)」といわれているもので、「宗教」について答えに窮する問いかけである。「宗教のことどうお考えなの？ (Wie hast du's mit der Religion?)」(3415, S.109) 疑念もなく神への一途な信仰を持つ女性から尋ねられたら、どのように応えるのか？ それについてはいずれ取り上げたいと考えているが、ここでのファウストの弁には、ゲーテの考えている汎神論的な考えが表われている。「一切を抱くもの (Der Allumfasser) ／ 一切を支えるもの (Der Allerhalter)」(3438-9, S.109) を信じているのだが、それに名前をつけることはできないのだ、という。グレートヒェンは一応納得しながらも、キリ

スト教を信じていないことを感じている。

さて、前置きはこのぐらいにして、「糸車の歌（糸を紡ぐグレートヒェン）」に取りかかることにする。

GRETCHEN am Spinnrade allein.

Meine Ruh' ist hin,
Mein Herz ist schwer;
Ich finde sie nimmer
Und nimmermehr.

Wo ich ihn nicht hab',
Ist mir das Grab,
Die ganze Welt
Ist mir vergällt,

Mein armer Kopf
Ist mir verrückt,
Mein armer Sinn
Ist mir zerstückt.

Meine Ruh' ist hin,
Mein Herz ist schwer;
Ich finde sie nimmer
Und nimmermehr.

Nach ihm nur schau' ich
Zum Fenster hinaus,
Nach iohm nur geh' ich
Aus dem Haus.

Sein hoher Gang,
Sein' edle Gestalt,
Seines Mundes Lächeln,
Seiner Augen Gewalt,

Und seiner Rede

Zauberfluß,
Sein Handedruck,
Und ach sein Kuß!

Meine Ruh' ist hin,
Mein Herz ist schwer;
Ich finde sie nimmer
Und nimmermehr.

Mein Busen Drängt
Sich nach ihm hin.
Ach dürft' ich fassen
Und halten ihn,

Und küssen ihn,
So wie ich wollt',
An seinen Küssen
Vergehen sollt'. (3374-3410, S.107-9)

グレートヒェン（糸車のそばで、ただひとり）

安らぎは去り
心は重い
もう安らぎを見いだせはしない
もう二度と

あの方がいないところ
わたしには墓場
この世界もすべて
わたしには不快なもの

哀れな頭
おかしくなって
哀れな意識
もうバラバラに

安らぎは去り

心は重い
もう安らぎを見いだせはしない
もう二度と

あの方を求めて ただ
窓から外を眺める
あの方を求めて ただ
家から出て行く

あの方の雄々しき歩み
あの方の気高きお姿
あの方の口もとの微笑み
あの方の眼の力

そして あの方の語らいの
抗しがたい魅惑
あの方の握りしめる手
そして ああ あの方の口づけ

安らぎは去り
心は重い
もう安らぎを見いだせはしない
もう二度と

胸の想いは あの方の方に
押し寄せる
ああ　手を伸ばしてあの方を捉え
あの方を離さないで

あの方に口づけができたら
そう 思いのままに
あの方との口づけで、
たとえ滅び去ろうとも！

一詩行が三詩脚から六詩脚までで、比較的短い詩行で形成されている。四詩行で一詩節が構成されて、十詩節でこの詩は成立している。この詩の音声の形、韻律やリズムなどを考え

てみたのだが、一定の法則を当てはめることは無理のようである。それだけ感情が激しく表出しているのかもしれない。しかし、詩形から考えられうる若干のことを述べておく。

すぐに判ることであるのだが、同じ詩節が第一詩節、第四詩節、第八詩節に繰り返されている。この詩は、第一から第三詩節、第四詩節から第七詩節、第八詩節から第十詩節、と三つの部分から成り立っている。脚韻は、第二詩節が AABB と踏んではいるが、それ以外の詩節では、＋ A ＋ A となっており、第二詩行と第四詩行に踏まれている。この短い詩行を考えると、一行を二行に分けられているようで、二行で一つの句だとも考えらる。これらの脚韻はすべて、男性韻（強音を踏む）である。音が余韻となって残ったまま、次の行に、次の詩節へと続いていくようである。第二詩節から第三詩節、第六詩節から第七詩節、第九詩節から第十詩節の「またぎ」（アンジャムプマン）をみると、同じ句が繰り返されていることが判る。第十詩節の第一詩行にある, küssen ‘は、前詩節の, dürfen ‘とまたがって結びついている。詩の形としては、詩節のなかで収まっているのが通常であり、これは破格だともいえる。

リズムはおおむね、ヤンブス（弱強格）かアナペースト（弱弱強格）をとっているのだが、出だしの第一詩節の第一詩行と第二詩行を見ただけで、戸惑ってしまう。

この詩は解釈する必要などはない。少女の、三人称単数の人称代名詞でとられている「あの方」への恋慕の想いがつづられている。はじめの三詩節は、「あの方」がいない世界は死んだも同然で、頭も心もおかしくなっていくことが述べられている。次の四詩節は、いつも「あの方」の面影を追い求め、心の内に「あの方」の姿や仕草を思い浮かべている。その決定的なことが「キス」であった。どれほど甘美な「キス」であったのだろうか！ 終わりの三詩節は、「あの方」をしっかりと抱きしめ、たとえ我が身が滅んでいこうとも、思いのままに「口づけ」をしたい、と願うのである。“Küssen “も最後はなぜか「口づけ」という訳にしてしまった。世の男性方、もし女性に、これほどまで離れがたく慕われたら、どうしますか？！

喜多尾道冬氏は「ドイツ・リート展望」（グラモフォン『フランツ・シューベルト歌曲大全集』解説、45 ～ 7 ページ）で、「象徴的な意味でも、また厳密な意味でも、ドイツ・リートが成立したのは 1814 年 10 月 19 日という、ある特定の日付に限定できるのではないか。それはシューベルトの《糸を紡ぐグレートヒェン》の作曲された日である」と述べられている。17 歳のシューベルトが最初に作曲したドイツ・リートはこの詩をとったものである。それまでも多くのリートが作曲されていたが、それらは詩を覚えてもらうためのメロディーや伴奏のようなもので、詩人も音楽が強く干渉してくることを嫌ったのである。都会に新しい社会階級として市民層が成長するなかで、ピアノ・リートの発展の兆しが見え、リートの楽譜需要が増大していく機運のただなかで、この曲が生まれた、と述べられている。

さらに、このリートの革新性を「声部と伴奏の有機的、ないし弁証法的な結びつき」にあるとして、次のように述べる。

《糸を紡ぐグレートヒェン》の伴奏の糸車のまわる音は、情景描写にとどまらず、グレートヒェンの心の不安をも反映している。同時にそれは、田舎の共同体的な小世界からほうり出され、たえず膨張発展し、行き先のわからぬ都市に投げ込まれた都市の住民の不安と期待をもひびかせていた。まさにこの未来感にこそシューベルトのリートの新しさがある。

名曲といわれるシューベルト作曲の「魔王」も全曲、馬の蹄の音が流れる。その音は、人物の不安な心中を示していて、それが止むときに、子供の死が確認されるのである。

ドイツ・リートを、抒情詩が音楽とジャンルを超えて連携してできた幸福な芸術ジャンルであるという考えもある。わたしたちは、小学校や中学校の音楽の時間に「野バラ」や「ローレ・ライ」などのリートを唄った記憶もある。日本では、明治時代から、西洋の音楽として、ドイツのそれを学校教育などに取り入れてきた。音楽室にはバッハからシューベルトまでぐらいの肖像画が掛けられていた。現在でもなお、その恩恵に預かり、週に二回、「野バラ」のメロディーが外から聞こえてくると、慌てて「もやせるゴミ」の袋をもって、家の前に飛び出ていく。ベートーヴェンの「エリーゼのために」のときは、紙類の資源ゴミの出す日なのである。

リートが多くの抒情詩を身近なものにしてきたことは否めない。本来ならもう消えてしまっているような詩でも、現在なお、多くの人々に唄われて、生命が与えられている。その契機が、この《糸を紡ぐグレートヒェン》をシューベルトが作曲したことによるのである。

もう 20 年ほどまえのことになるのであろうか、一年生の基礎ゼミで、この詩について発表した学生がいる。今は沖縄国際大学で職員として、真心を持って勤務している比嘉優太多 (仮名) 君である。「グレートヒェン悲劇」のあらましでも発表するのかと思っていたら、この詩の最初の詩節を読み上げ、「ぼくはグレートヒェンのような女の子が好きだ」とか、次に続く詩節を読み上げるたびに、「ぼくはグレートヒェンのような子を彼女にしたい」とか、「ぼくも女性からグレートヒェンぐらい愛されたい」とか、いろいろと御託を並べるのである。挙げ句に、そっと両手を胸に当て、中空を見詰めるような仕草をする。ヒゲぐらい剃ってきてほしかった。

（2021. 1. 29）